

育英短期大学幼児教育研究所紀要 第15号 (抜刷)

学生の子育て支援活動と教育的効果に関する考察

小 屋 美 香 ・ 星 野 真由美

A Study on Educational Effects of Child Care Support Activities by Students.

Mika KOYA

Mayumi HOSHINO

学生の子育て支援活動と教育的効果に関する考察

小 屋 美 香 星 野 真由美

1. 活動と研究の目的

平成6年(1994年)に「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」(通称「エンゼルプラン」)が策定されてから、20年以上が経過した。この間も様々な「子育て支援」に関する取り組みが行われてきたが、少子化の進行、乳幼児への虐待の増加、都市部を中心とした認可保育所の待機児童問題等、依然として深刻な現状にある。これらの問題を解決し、安心して子どもを産み育てられる社会の実現を目指すために、平成27年(2015年)に、「子ども・子育て支援新制度」が開始された。その取り組みの一つに「地域の実情に応じた子ども・子育て支援の充実」が挙げられ、利用者支援、地域子育て支援拠点、放課後児童クラブなどの充実を図ることが打ち出されている。特に保育所は、これまでも地域の子育て支援の拠点として重要な役割を担ってきた。保育所を利用する子どもだけでなく、その保護者に対する支援、更に地域の在宅の子育て家庭を含む「すべての家庭及び子どもを対象」とした子育て支援事業の充

実が今まで以上に求められるようになり、保育所の保育士に限らず、認定こども園や幼稚園を含む、全ての保育現場で働く保育者に期待される役割となっている(図1)。

こうした新制度の動向は、保育所保育指針の改定にも影響していると考えられ、平成28年(2016年8月)の「保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ」においても、「保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性」が改めて重要な方向性の一つとして示された。「子どもの育ちを家庭と連携して支援していくとともに、保護者及び地域が有する子育てを自ら実践する力の向上に資するよう(略)」、「保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者の自己決定を尊重すること」、「保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努めること」、「保護者の状況に配慮した個別の支援」の必要性などが、平成29年(2017年)の保育所保育指針改定案においても提示されている。

保育者養成課程のカリキュラムにおいても、関連する多くの科目の中で、学生が保護者との連携や保護者支援、子育て支援について、学ぶ機会はある。しかし、実際に保育現場で学ぶ教育実習や保育実習の際に、保育者が保護者と関わる様子は観察できても、実習生自身が直接保護者と関わる機会を持つことはほとんどないのが実情である。「保育実習指導のミニマムスタンダード」(2007)の中でも、「家庭や地域との連携」について触れられているが、実際の実習を通して、学生が理解するところまでは至っていない。

保育者養成校を卒業して保育現場で働くように

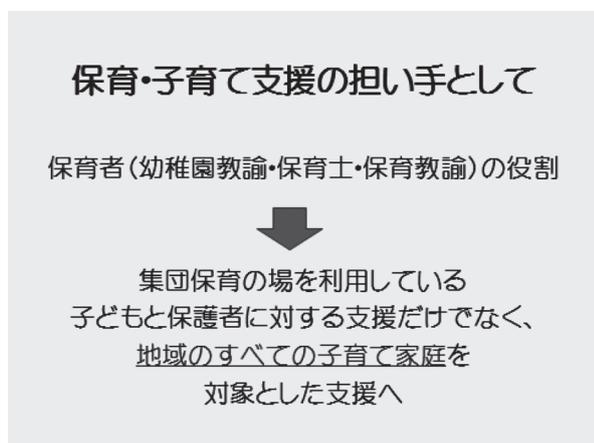


図1・保育者の役割

なると、すぐにこの保護者対応や保護者支援、子育て支援に直面することが分かっているが、在学中に、そのことを実践として学ぶ機会が少ないことは検討すべき課題であり、養成校の教員としても工夫が求められる部分でもあるといえよう。

また、乳児期からの入園希望が増えて待機児童が多くなっている現状もあり、前述の中間とりまとめでは、「乳児・1歳以上3歳未満児の保育の重要」についても再認識され、乳児保育に関する記載の充実が図られることとなった。保育実習Ⅰ（保育所）を経て、保育実習Ⅱ（保育所）を選択したとしても、各おおむね11日間の限られた実習期間の中で、乳児のクラスに直接入れる機会は、合計でも数日程度であることが多い。

このような現状から、学生が直接、乳児期の子ども、そして保護者と関わりを持ちながら子育て支援について考え、学ぶことができる機会となるように、学生が主体で行う子育て支援活動を学内で実施することとした。活動を始めるにあたって設定した主な目的は、以下の4点である。

- ① 3歳未満児の発達に即した遊びや関わり方、またそれに適した環境設定についての理解を深める。
- ② 実習では、なかなか経験できない保護者対応や保護者支援を通して、子育て支援についての理解を深める。
- ③ 学生が自分たちで計画し、実践することで気づきを得る。
- ④ 身近な遊びで親子がふれあうことを通して、親子の絆を深める。

保育者養成校で実施されている保育・子育て支援の実践について調査を行った入江ら（2017）によると、その実施形態は、①教室型、②ひろば型、③派遣型の3つに分類される。今回の活動は、親子のふれあい遊びを中心とした、ひろば型であり、名称は『親子あそび広場』として開催した。そして本研究では、活動後の学生の振り返りに着目し、

学生が主体で行う子育て支援活動がもたらす教育的効果について検証することを目的とした。

2. 親子あそびの概略と理論的背景

近年、関係性の中で「心を育む」保育の重要性が指摘されている（鯨岡2013）。目に見えやすい能力の育ちに比べると、子どもの心の安定、充足感や自己肯定感、他者との信頼感といった心の育ちに関しては、気づこうとしないといつ見過ごされがちな保育の側面である。この「心を育む」保育を行っていくには、乳児期からの保育の質の理解や関わり方、特に情緒的育ちの基盤となるような子どもの情動への同調やスキンシップを含む敏感な反応や遊びといった関係の相互性についての視点が重要となる。しかし、前述したように、乳幼児期の親子の関わり方を観察したり、直接関わっていく機会が少ない学生が、親子の相互性のあるやりとりに気づいたり、その関係性にアプローチするような支援を理解するのは難しいのが実情である。そこで『親子あそび広場』では、近年の乳幼児研究、特に親子の相互作用のあり方に焦点をあてた理論を基盤とした遊びや関わり方を導入し、実際に親子のやりとりを観察し、自らも直接関わりながら、関係性を捉える経験となるよう工夫した。

今回実施した遊びの多くは、親子のアタッチメントを基盤に考案されたセラプレイの方法を応用した。アタッチメント理論では、安全基地である親が近くにいるかどうかよりも、親の存在の質や子どもに対する親の行動の違いが注目されるようになっており、さらに近年の研究では、養育者の心の状態と子どものアタッチメントの状態との関連性がより強調されるようになってきている（ミュージック2016）。セラプレイは、「親／子のアタッチメントや関係を強めること、親子両者の自尊感情を育てること、信頼感を高めること」を主要な目標として考案された（マンス2011）、親子両者に影響を与え親子の関係性にアプローチす

る方法である。たとえば、抱っこされたり、一緒に揺れたり、ローションなどをつけてもらうような温かケアのあるやりとりの中で、子どもは他の人とつながっていることを確認していく。親は子どもの波長に合わせ、子どもの欲求に応えるようにしていき、一緒にいることを楽しんでいく。こうした相互性のある活動を通して、「強く有能な自己という子どもの内的感覚、自分は価値があり愛されているという感覚、そして養育者との安全なアタッチメントの感覚」が育っていく（マンス2011）。

実践の前段階として、学生たちには乳幼児期の発達、関わり方に関連する、脳科学研究の理論やアタッチメント理論などについて講義した。そして、情動調律や情緒応答といったやりとりについてロールプレイを行ったり、相互性のある遊びやスキンシップを多用する遊び、多様な感覚にアプローチする遊びなどについて学ぶ機会を作った。遊びに含まれる作用についての理解を基に、次のような遊びを実施した。

たとえば、「バスでドライブ」の遊びはリズム遊びとしてよく実施されているもので、歌に合わせて母親の膝の上で揺れたり、左右に倒れたりする活動である。この遊びには、まず母親に密着して座るというスキンシップによる安心感があり、歌やリズムに合わせて揺れる、動くという聴覚、触覚などの感覚や協調運動が使われている。さらに、子どもの反応をみながら揺れを大きくしたり、小さくしたり、タイミングを合わせて倒れたりする中には、子どもの波長や欲求に応える相互性も働いている。「魔法の絨毯」の遊びは、厚手の布の上に子どもが寝そべり、親が布をゆっくりとひいていく活動である。ここでもアイコンタクトが取れたら動き出すルールにしたり、子どもの名前を歌詞に入れたゆったりした歌を歌いながらそれに合わせて布をひいていくように工夫する。そうすることで、この遊びにも、子どもとの相互性、子どもへの適度な感覚の刺激、大事にされている

という内的感覚につながる要素が含まれていく。

このように、『親子あそび広場』で実施した遊びでは、親子と一緒に楽しく活動する中で、子どもはケアされ、遊びの中に含まれる無条件の受容の感覚の中、子どもが、自身の存在自体が十分に価値のある素晴らしいものであると感じることを目的のひとつとして計画を行なった。

3. 活動概要と研究方法

I 短期大学保育学科2年生の「保育・教職実践演習」の授業の中で、筆者らが担当するゼミの学生（Kゼミ15名、Hゼミ15名）がこの活動に参加した。前期の「保育実践演習」で、事前学習や準備を行い、後期の「教職実践演習」の中で、子育て支援活動の名称を『親子あそび広場』として、平成27年（2015年）11月から12月の間に計4回実施した（本事業は、平成27年度後期・育英短期大学教育改革推進プロジェクトの採択事業である）。対象は、0～3歳頃までの子ども（未就園児）とその保護者で、平成27年（2015年）10月に案内チラシを配布して募集を行い、10組程度を募集したが実際には計15組（全組、母親であった）が参加した。安全には十分配慮したが、万が一に備えて保険加入の手続きも済ませた。

場所は学内の保育演習室（写真1）、開催日は全て後期「教職実践演習」の授業開講日である平日の木曜日で、10時50分から受付を開始し、11時



写真1・会場の様子

表1・会の流れ

時間	会の流れ
10:30	学生集合、準備（役割分担）
10:50～	受付、自由あそび、おもちゃなどの片付け
11:00	はじまり（歌、手遊び、読み聞かせ、パネルシアターなど）
11:10～	主活動（ふれあいあそび、感覚あそび、運動あそび、製作あそびなど）
11:40（50）～	おやつタイム（保護者はアンケート記入）、交流
12:10頃	終了、見送り（そのまま、残る親子はランチタイム）
13:00までに	片付け（学生は振り返りシートを書いて、翌月曜までに提出）

表2・各回の主な活動内容（あそびのテーマ）

	あそびのテーマ	主催	補助
第1回	体を使うあそび・運動あそび	Kゼミ	Hゼミ
第2回	親子のふれあいあそび①	Hゼミ	Kゼミ
第3回	手を使うあそび・製作あそび	Kゼミ	Hゼミ
第4回	親子のふれあいあそび②	Hゼミ	Kゼミ

から、その回のテーマに沿った活動を行い、12時10分以降、自由解散という流れであった。会の流れについては表1に、全4回の主な活動内容（あそびのテーマ）については表2に示す。第1回と第3回はKゼミが、第2回と第4回はHゼミが主催で実施し、主催でないときは補助（受付、環境設定、おやつ準備、撮影係など）を行った。

毎回、活動時には参加した保護者へのアンケート（参考資料1）を実施し、学生は活動後に振り返りシート（参考資料2）への記入を行った。また、参加者の承諾を得て活動の様子をカメラやビデオにて撮影し、学生は映像を観ながらの振り返りも行った。

本稿においては、学生の振り返りシートの項目「今日の広場に参加してくれた親子の様子を見て、どのようなことに気づきましたか？」の部分より、「母親達の様子」と「子ども達の様子」について、及び「“親子であそぶ”ということについて考えたことや気づいたこと」と「この時間を過ごして

一番良かったこと」の4項目の記述内容を対象とし、ラベルとなるキーワードや概念を抽出して、学生の気づきや学びに関して分析を試みることにした。

4. 結果と考察

まずは、回を重ねるごとの変化を見る為に、記述内容は第1回から第4回までの開催回ごとにまとめ、それぞれのテーマ（項目）に関するラベルを作成した。筆者らで意味を確認しながら、内容の近いラベルをグルーピングし、抽象化して概念を生成した。本章では、ラベル配置による構造化から見てきた結果を次に記し、考察を述べることにする。

（1）母親達の様子について

「母親達の様子」に関する気づきとして、1回目に多かったのは、とにかく親は“子どものことをよく見ている”という内容であった。それには、

子どもの様子・動き・表情をよく見る、“見守る”だけでなく、“目が離せない”大変さも含まれている。「歩いて自由に動き回れる子が多かったので、お母さんたちは常に子ども達がどこにいるのかを探していて、目が離せないのだと思った」(原文ママ、以下同様)、「子ども達を常に見ていて、自分のことよりも子どものことって思った」といった母親の視線に関する気づきがあった。初回ということもあり、“慣れない・緊張”した様子も見受けられたが、子どもが楽しそうにしていると親も嬉しそうという“楽しさの共有・共感”、“親子の相互作用”に対する気づきも多い結果となった。「お母さん同士でもたくさん話をして情報交換していた」、「悩みを話せていて、少しは悩みが減ったかなと思いました」など、『親子あそび広場』の場が“母親同士の交流”の場となっており、そのこと自体に意味があるということに気付いている様子も見受けられた。

2回目は、前回との比較から、“慣れ・リラックス・安心”というキーワードが挙がり、親自身が“笑顔”で子どもと“一緒に活動を楽しむ”様子に関しての気づきが増えている。「2回目ということもあり、慣れてきていて緊張もほぐれているように感じました」、「2回目で慣れていることもあり、あまり緊張した様子がなく、子どもを楽しませようと積極的に活動に取り組んでいました」、その一方で「前回に比べて、緊張が和らいでいるように見られた(人による)」、「保護者の方も楽しそうに活動をする方とそうではなく緊張し控えめな方もいました」というように“保護者一人ひとりの違い”に気づける学生もいた。1回目に多かった「親は常に子どもを見ている」という全体的な印象としての意見は減り、2回、3回と回を重ねるごとに、母親たちの具体的な“子どもへの関わり方”に着目する頻度が増え、“子どもの主体性の尊重”や“声かけ”、活動や遊びへの“促し方”が上手で、保育者を目指す学生達にとっては、“参考”となる学びとなっていること

が分かった。「子どもが遊びに入りやすいように関わっていた」、「遊んでいる時、おやつを食べる時など、子ども達の反応を見て、どのようにするかすぐ対応していた」、「子どもが飽きてしまった時に無理やり活動に参加させずに見守っているお母さんがいて、子どものやりたいことを一番に考えていてすごいと感じました」、「一つ一つ丁寧に子ども達に声をかけていたと思います」など、母親達が子どもに関わる様子を間近に見ることができたからこそその気づきである。また、「学生が言葉につまっても、待ち、聞いていただけた。言葉不足でも行いたいことを理解していただき、学生のやりたいことをスムーズに進めることができた」と、学生の未熟さを理解しつつ、活動に参加して下さり、こうした経験が、学生にとって“学び・成長の機会”となっていることを確認した。

3回目は活動内容の影響を受け、「普段家ではできないようなスタンプ、粘土遊びをしている子どもの様子を見て、とても嬉しそうなお様子だった」、「今回は遊びを含めた制作のような感じだったので、子どもが作った作品を見て喜んでいるような様子だった」と、作品や物に対する“親の満足感”についての気づきがあった。そして「慣れてきた様子で、子どもに自由にさせている保護者が多くなってきたと思います」というように、子どもの“主体性の尊重”が増えていった。

4回目になると、母親の子どもへの関わり方についての気づきが、より具体的な内容に分化している。また、全4回を通して、“母親同士の交流”の深まりや“和やかな雰囲気”を感じ取っていた。この雰囲気の背景には、提供する場の作り方や遊びの内容と質も影響していることが推察できる。一度限りで終わってしまう活動ではなく、継続的に実施できたこと、参加者が同じであったこと、振り返りシートへの記入を通して学生の意識や視野が広がっていったことなどが、今回の学生の学びを深めていった要因になっていると考えられる。

(2) 子ども達の様子について

「子ども達の様子」に関しても、参加した子どもの月齢や年齢も影響し、特に1回目は“人見知り・場所見知り・緊張・戸惑い”など、“個人差”はあるものの“慣れない”様子への気づきが多く挙げられていた。しかし、母親が一緒であることの“安心感”もあり、徐々に“友達や遊びに興味”が広がっていく様子にも気づいている。思っていた乳児の“イメージとの違い”や“きょうだい”がいる子どもの関わり方の違いについての気づきも見られた。

母親同様、2回目になると“慣れ・リラックス”、“笑顔”といったキーワードが増え、“個々の遊びの様子”に対する具体的な気づきが増えている。「以前では人見知りや初めての場に慣れずに泣いてしまっていたお子さんも少し慣れてきて、笑顔が見られた」、「前回よりも慣れたような感じで、最初から遊ぶ子が増えていたと思いました」、しかしまだ「なかなかお母さんと離れられない子もいた」、「お母さんがいないと泣きそうになる子もいたが、活動中はお母さんと一緒に笑い合っていた」など、前回との比較から子どもの様子の細かい変化にも気づけている様子が伺える。

3回目では、「じっと座れなかった子もスタンプや小麦粉粘土など感触が楽しめる遊びでは、興味を示しており、集中していた」、「粘土を楽しむ子、ペタペタスタンプを楽しむ子、なかには苦手な子も様々いるなと思いました」、「遊びによってそれぞれの子どもの表情に違いが見られた」のように、遊びによる“反応・表情・心情の違い”にも触れ、個々の“子ども理解”につながっていることが分かる。

4回目では、「子どもも慣れてきたので、お母さんと少し離れても遊べる子や遊びを楽しんでいる子が多かった」、「子ども達もだいぶ慣れてきて、元気に動き回っている姿や笑顔が良く見られた」、「1回目、とても緊張していた子も4回目と

なるとかなり緊張もとけていて、笑顔が見られたことは嬉しい」、「緊張している姿も少し見られたが、全4回の中で一番リラックスしていた。自由に遊ぶ姿も見られた」、このように“初回からの変化”を通して、“成長・発達”、そして改めて、子どもにとっての“母親の存在”の大きさ、“親子で一緒に楽しむ”ことの大切さを再認識していた。「トンネルをくぐった後、お母さんを見つけた時の子どもの表情が今までで一番良かったと思う。1回目ではお母さんと離れるとすぐに泣いてしまっていた子も、一人で挑戦することができたりと成長を感じられた」という意見もあった。

「(風船あそびでは)目の前から来る風に戸惑っていたり、少し怖がっていたり、楽しんでいる子がいたり、その子その子で感じ方が違うのかなと思いました」、「子どもによって遊びに対する反応は様々でした」といったように、感覚あそびの反応の違いなど、“子ども一人ひとりの表情や感じ方の違い”、“個性”に対する理解も回を重ねた結果、深化していっていることが見て取れた。子どもが見せてくれる笑顔や遊びを楽しんでいる様子は、学生自身の“喜び”や“達成感”にもつながっていった。月齢や年齢、発達段階の違いだけでなく、子どもの個性や感じ方、育ちは、一律ではなく、その場の、その時の、状況によっても変化する。親が抱く子どもへの思い、子どもが抱く親への思い、両方を大切にしながら、保育者として、どう親子と関わっていったらよいか、そのための示唆を得る気づきとなったのではないだろうか。

(3) 親子で遊ぶということについて

「“親子で遊ぶ”ということについて考えたことや気づいたこと」に関して、第1回目に多かったのは、“実習では見ることのできない”親子の関わりを身近に観察し、“親子一緒”に遊ぶことで“信頼関係や絆”が形成されるという内容と、こうした“時間や環境”は大切であるという機会

の設定に対しての内容であった。他には乳児期からの子どもと実際に関わったり、“人見知り”や“親と一緒に安心”していく様子などをみて、この時期の“発達”に関する再認識が多い結果となった。2回目は、スキンシップを取り入れた遊びを展開した影響もあり、“触れ合い”“目と目を合わせる”ことから“安心感”や“楽しさ”につながるといった関わりの質への着目が多くなった。3回目では、「親子の表情が比例しているように見えた」など、親子間の表情の同調や親子の関係性は相互に影響を与え合うものであるという気づきが現れた。また、子どもへの関わり方に関しては、“主体性の尊重”“子どもの興味”に関心を寄せる姿勢、“見守り”の姿勢を感じ取っていた。4回目は、“安心”“愛着”“挑戦”“甘え”などの子どもの情緒反応に、より気づくようになっていく。さらには、“子育ての現状”の大変さへの共感と「遊びを家でも実施して欲しい」という、活動の“家庭への広がり”や支援者としての“第三者の存在”の意義についての意見が出された。学生が考えたことや気づいたことに関する記述の抜粋を表3に示す。

(4) 良かったことについて

「この時間を過ごして一番良かったこと」に関する項目は、振り返りの内容が限定されていないため内容も多様でこれまでの結果と重複する部分もあるが、この項目で抽出されたキーワードをもとに整理する。

まずは、親子で一緒に遊べる時間や場所は大切、身近に親子の関わりを観察できる機会が持ててよかったというような、“場所と時間の提供”が出来たこと、“観察の機会”持てたことがあげられた。『親子あそび広場』の実施によって、学生と親子、保護者同士、子ども同士が集う場所と時間が提供され、学生はそこで親子の関わりの様子を間近で観察する機会が得られた。こうした観察から3回目の実践では、例えば「子どもたちの楽

しそうな表情を見ることができた」「1回目より、表情が明るくなった子どもの様子が見られた」というような、“子どもの表情・情緒の気づき”が見られるようになった。

次いで、子どもの様子だけでなく、“親子の関係性の気づき”も見られるようになってくる。親子の表情の同調や、子どもに合わせた親の反応、親がいることで安心する愛着関係など、相互に影響しあっている関係性に気づくようになる。例えば、「お母さんと子どもが楽しそうに向き合っている時に楽しんでもらえたと思った」、「親子が笑顔で触れ合っている様子などを見ることで気持ちがほっこりしました。お母さんは、子どもが楽しく活動できるととても嬉しく思うのだと気づいた」という意見が見られた。さらに、こうした関係性への視点を土台とした子どもへの関わり方についての気づきもあった。それらは、子どもの様子に合わせて歌の「歌詞を工夫することや、こうしたら親子がさらにふれあえるという考えがわかった」、「子どもと一緒に活動する中で、子どもが主役であることを大切にすることを改めて感じられた」といった意見に反映されている。

また、継続して実施したことを反映して、“変化への気づき”のキーワードも生成された。これには、「前回よりも子どもも私たちも緊張がほぐれて安心しながら楽しめた」のように、子どもの変化だけでなく、保護者の変化、親子の変化、学生達自身の変化に関する記述が含まれている。

本実践は、学生が直接親子に関わりを持っていったが、2つのゼミで主催と補助の役割を交互に実施した。それを反映して、“主体的参加”、“補助的参加”のそれぞれを体験できたことが良かったことの一つとしてあげられていた。“主体的参加”によって学生は“責任感”を感じ、緊張の中で“個別的な関わり”に挑戦し、“子どもの反応の多様性”を実感していった。そして回数を重ねていくことで“慣れ”てくると、“積極的関わり

表3 “親子で遊ぶ”ということについて、考えたことや気づいたこと

	学び (抜粋)	中位概念	上位概念
第1回	親子で遊ぶことで信頼関係が深まり、絆や情緒関係が形成される	信頼関係・絆の形成	関係性の視点
	親子と一緒にいられる時間は大切だと思った。 親子の関係をしっかり見つめ、リラックスして楽しめる環境をつくる	時間・環境の提供	
	親がいるから子どもは安心して遊べていたと感じた。 親子が遊ぶ姿を見て、子どもが楽しそうで安心するんだなと思った	親と一緒に安心感	子どもの情緒反応
	触れ合い、抱っこ、笑顔が大切だと思った。 家でもできるスキンシップあそびが展開していくべきと思った。	触れ合い スキンシップ	子どもへの関わり方/ 親の反応の大切さ
	親子の様子を見て関わり方が違うので、学ぶことができる。	関わり方の違い	
	親が声かけするなど、子どもの動きに反応してあげることが大切	声かけ	
	身近にある物で簡単にあそぶことができると知った	身近な物	遊びの方法・内容
	普段お母さんたちが子どもと接してあげているからこそ、人見知りもするしお母さんと楽しく遊べているのだと思った	人見知り	発達理解
	家事・育児に忙しい方や2人、3人とお母さんがいる方はなかなか1人1人と触れ合う機会は少ないのかなと思った	子育ての状況	子育ての状況
	ママと子ども、ママ同士、子どもと学生、ママと学生が情報を提供したり、遊びを提供できた	情報交換	多様な交流の機会
実習では見ることでできない親子の関わりをみることでできた	初めての観察		
第2回	子どもは触れ合って遊ぶことで安心感を得ているように思った 子どもはお母さんと触れ合うことが大好きで落ち着く。お母さんが側にいてくれることで安心し、活動を楽しめている	触れ合いと安心感	子どもの情緒に影響を与える関わり
	親子が身体を触れ合わせながら、笑顔でコミュニケーションをとって遊ぶことは、親子関係を築く上で大切だと思った スキンシップを通した遊びは子どもがとても喜ぶことがわかった	スキンシップ・コミュニケーション	
	コットンボールを使って子どものほっぺを触ったり、投げ合ったりなど、遊びの中でやりとりすることが大切だと思った	やりとり	遊びの方法・内容/関係の広がり
	ボールを使った遊びでは全体を通して一体感があった お母さんを間にして子ども同士でも関われる遊びが入っていた	一体感・仲間遊び	
	目と目を合わせることで、指さしや言葉への反応が重要と感じた 表情や言葉かけの大切さを感じた	(敏感に) 反応すること	子どもへの関わり方/相互作用
	親子で同じ時間を共有することでさらに絆が深められる	絆の深まり	関係性の視点
親子で関わる時間があることで関係が深まる/一緒に遊ぶ時間は大切	一緒に時間		

第3回	お母さんも安心してあたたかな表情をしていると子どももニコニコしている／親子の表情が比例しているように見えた	表情の同調	相互作用／関係性の視点
	子どもが楽しいと感じていることに親も共感できることは、親子関係を築く上で大切だと感じた	共感	
	親子あそびを通じ、親と子の絆を深めるきっかけとなったように思った	絆の形成	
	親子で同じ遊びを楽しむことがすごくいいことだと思った。	楽しさの共有	
	子どもの主体性を考え、あそびを広げていく役目を保護者の方がされていた	主体性の尊重	子どもへの関わり方
	お母さんが子どもをやさしく見守ることで、子どもが伸び伸びと楽しめる	見守りの姿勢	
	子どもの興味を持ったことに耳をかたむけ、目を見て話すことが大切	子どもの興味への関心	
	お母さんは子どもから目を離さず、一緒に活動に参加していた	目を離さない	遊びの内容・方法を考える
	家で行うことが難しい遊びを親子で遊ぶことで、今まで見たことのない子どもの様子が見れたと思う／家庭では製作はほとんどやらないと思う	家でやらない遊び	
	遊びをママにも紹介していくことで家でも楽しめる遊びが増えると思う／一緒に遊べる活動が沢山あって家でもできる良さがある	家でもできる遊び	
子どもの好きなあそびを知ることができる	好きな遊び		
第4回	抱っこや手をつなぐなど、スキンシップのある遊びでは子どもがママの顔をじっと見つめていて、安心して遊んでいた	安心 愛着	子どもの情緒反応
	挑戦する気持ちを持っていた	挑戦	
	まだ甘えたいという気持ちもあると思った	甘え	
	お母さんの表情や動きが子どもたちに伝染すると思った	表情の相互性	相互作用・関係性の視点
	大人の関わりで子どもの遊びの幅が広がったり、楽しさが増すと感じた	遊びの幅	
	一緒に時間は大切／親子で遊ぶ時間は大切	一緒に時間	
	子どもが自分でやりたいという気持ちを大切に、見守る場面も見られた	気持ちの尊重と見守り	子どもへの関わり方
	スキンシップの大切さを学ぶことができた	スキンシップ	
	一対一での関わりは大切だと思った	一対一	
	下の子、上の子がいても目と目を合わせての行動は大切だと思った	アイコンタクト	
	子どもと関わる時の表情や口調はすごく大切	表情・口調	親子あそびの作用
	コミュニケーションをたくさんとれる	コミュニケーション	
	子どもと親の信頼関係を作るために必要	信頼関係の形成	
	2人の時間は忙しくてなかなかとれないかもしれない凄く大切／なかなか親子でじっくり遊びを通し関わる時間はとれない	子育ての現状	支援者の視点
家でもできるような遊びは、持ち帰って家庭でのスキンシップにつながると思った／家でもやってもらいたい	家庭への広がり		
親と子だけでなく、第3者が加わることで、お母さんたちが子どもたちへの新しい発見がある／周りの大人が一人の子どもを見ていることが大切	第3者の存在・支援		

の増加”が見られるようになった。また、“補助的参加”によって、親子や他の学生の様子を観察しつつ活動をサポートしていく役割から“客観的視点”による気づきを得ることが出来た。4回目の実践後には、「(主催)ゼミの人たちがまるで自分の子かのように子どもたちと積極的に関わっていたのが良かった」という補助ゼミ生の感想も見られた。

また本実践は、“乳児期からの発達理解”や“個人差の理解”、乳児期から親子で楽しめる活動の“遊び方、準備の仕方の理解”などの具体的、実践的な“学びの再認識”にもつながったようである。保護者との直接的関わりが持てたことから、“保護者との交流”が持て、母親の様子を観察する中で“子育てのリアリティ”を感じ、最後には“保護者への共感”が見られるようになった。

4. 成果と今後の課題

本実践は、実習では経験できない親子との関わりを継続的に持てたこと、主催と補助を交互のゼミで行うことで客観的な視点でも見る事ができたこと等、学生にとって学びや気づきが多く得られる機会となったが、参加した親子にとっても、また指導にあたった筆者ら教員にとっても、互恵性のある方法で実施できたことは今回の成果であるといえる。

教員による事前指導、学生の事前学習、そして

学生同士の話し合い・計画、準備・環境構成、親子との実際の関わり、学生個々の振り返り、全体の振り返り、そこから見えてきた反省や評価を次の話し合い・計画へと活かし、より良い活動へとつなげる一連の営み（PDCAサイクル、図2）は、学生の学びと成長につながっていった。保育者養成校で子育て支援活動を行う意義、つまり教育的効果は、そこにあるともいえよう。

また、今回の実践を通しての、学生の学びのプロセスとしては、親子の様子を初めて観察することから始まり、関係性を見る視点、相互作用を捉える視点、子どもの主体性を育む視点、子どもの情緒を感じる視点、個別性に敏感に対応する視点、保護者に共感する視点、自分達の活動を客観的に捉える視点において、学びの広がりや深化が見られた。（他のメリットについてもまとめて図3に記す）。

参加する学生は変わるが、平成28年（2016年）以降も『親子あそび広場』は継続して実施している（計7回実施／年）。活動の意義や目的、学生の主体性、役割意識の明確化、学びの共有化などを今後の課題として、より良い方向性を模索していきたい。

更に、参加親子への影響についても分析・考察を行うことで、親子支援という方向性から、改めて実践の内容についての検討を行っていきたいと考えている。

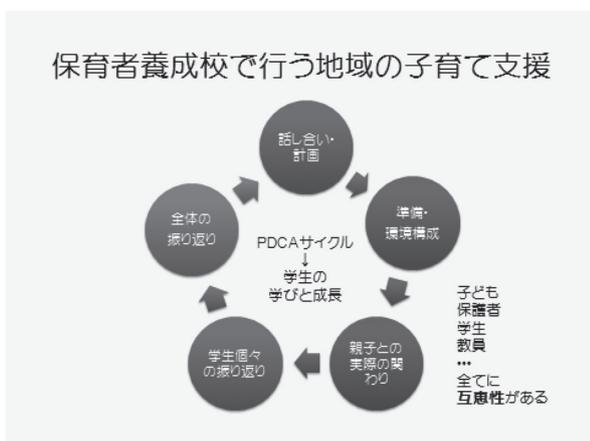


図2・学生の学びのPDCAサイクル

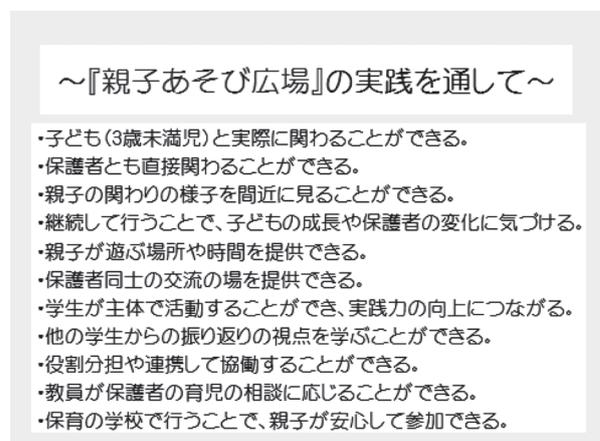


図3・保育者養成校で子育て支援活動を行う意義

参考文献

- 入江礼子・小原敏郎・白川佳子（2017）子ども・保護者・学生が共に育つ 保育・子育て支援演習、萌文書林
- 川喜田二郎（1970）続・発想法 KJ法の展開と応用、中央公論社
- 鯨岡峻（2013）子どもの心の育ちをエピソードで描く ―自己肯定感を育てる保育のために―、ミネルヴァ書房
- 全国保育士養成協議会（2007）保育実習指導のミニマムスタンダード、北王路書房
- 保育所運営実務研修会編（2014）わかりやすい保育所運営の手引き、新日本法規出版
- マンス, E.（2011）セラプレイ：アタッチメントを高めるプレイセラピー、チャールズ, C. E. 編著、プレイセラピー 14の基本アプローチ、創元社
- ミュージック, G.（2016）子どもの心の発達を支えるもの ―アタッチメントと神経科学、そして精神分析の出会い―、誠信書房

参考資料 1

親子あそび広場に参加して下さった皆様へ（平成 27 年 11 月 12 日）

今後の参考とさせていただきますので、今日の率直な感想をお聞かせください。

アンケート（選択肢がある項目は、当てはまる数字に○をお願いします）

①今日は参加してみていかがでしたか？

ママ

5. とても楽しかった
4. 楽しかった
3. あまり楽しくなかった
2. 全く楽しくなかった
1. どちらともいえない

お子さんの様子

5. とても楽しそうだった
4. 楽しそうだった
3. あまり楽しくなさそうだった
2. 全く楽しくなさそうだった
1. どちらともいえない

②今日の親子あそびは家でやってみるのに参考になりましたか？

5. とても参考になった
4. 参考になった
3. あまり参考にならなかった
2. 全く参考にならなかった
1. どちらともいえない

③今日の親子あそびで一番良かったあそびは何ですか？

④この時間を通して、「親子であそぶ」ということについて、何か考えたことや気づいたことがあればお願いします。

⑤今日の学生たちの動きや様子（お子さんへのかかわり方や言葉かけ等）を見て、何か気づいたことがあればお願いします。

⑥今後の親子あそび広場でやってほしいこと等があればお願いします。

ご協力、ありがとうございました。また次回お会いできるのを楽しみにしています。

お名前（ ） ←差支えなければの記入で結構です。

